

[リサーチハイライト 2]

丹波市における認知症予防を目指した多因子介入による ランダム化比較研究 (J-MINT PRIME Tamba)

尾寄 遠見^{1,2)}, 沖 侑太郎²⁾, 小野 玲²⁾, 古和 久朋²⁾

1) 神戸学院大学 総合リハビリテーション学部 作業療法学科

2) 神戸大学大学院 保健学研究科／認知症予防推進センター

運動、認知機能トレーニング、生活習慣病の管理などの複合的介入による認知機能低下の予防効果を明らかにした“The Finnish Geriatric Intervention Study to Prevent Cognitive Impairment and Disability (FINGER)”の報告以降、この成果はWorld Wide FINGERS Networkを通して世界各国で実証されつつある。わが国では、日本医療研究開発機構（AMED）の支援を受け、国立長寿医療研究センターの荒井秀典理事長を研究代表者とした、「認知症予防を目指した多因子介入によるランダム化比較研究（Japan-Multimodal Intervention Trial for prevention of dementia: J-MINT）」が2019年に開始された。

本発表で紹介するJ-MINT PRIME Tambaは、J-MINT研究の一部として神戸大学大学院保健学研究科／認知症予防推進センターが主体となって実施する研究である。本研究の対象は、少なくとも1つの血管リスク（高血圧や糖尿病）を有する65歳以上86歳未満の丹波市民であり、MMSEが24点未満の者などは除外される。対象者は無作為に介入群と対照群に分けられ、両群とも2020年9月～10月のベースライン評価をはじめ、6か月後、12か月後、18か月後のVisitごとにも評価される。評価項目は、主要評価項目である神経心理検査（FCSRTなど全7検査）のほか、身体機能検査（歩行速度など全7検査）、血液検査（HbA1cなど全28項目）、質問紙検査（EQ-5Dなど全15検査）など多岐にわたる。介入群には、週に1回90分の健康教室が18か月間にわたって提供され、有酸素運動、dual taskトレーニング、iPadを用いた認知機能トレーニングや栄養指導、Fitbitを用いた生活管理などの介入が実施される。

本稿執筆時点でベースライン時から約1年あまりが経過した。当初203例でスタートした対象者のdropout rateは8.4%（介入群7例および対照群10例の脱落）であり、非常に順調な研究遂行状況である。①リソースの少ない農村部において、②地域の実情に即し、③大学と自治体が連携して行う、という特色溢れる本研究は全国的にも注目度が高く、今後の認知症施策の発展に資する意義深いものとなっている。